

テレビとラジオの博物館

Museum of Television & Radio



現在の博物館の正面 ペーリー・センター・フォー・メディア

私は本当にテレビを見るのが好きだ。元々、本読みではなかった。小さい頃から、エンタメに限らず、知識や教養までもテレビと言う媒体のお世話になった。後に社会科の教師になったように、世の中の情勢を知るのにも、まずはテレビから得たと思う。高校位になってそのテレビでは飽き足らず、新聞のテレビ欄以外の頁も読むようになった。また雑誌や歴史書なども読むようになったのだが……。今でも細君に、「テレビばかり見て」と言われる。

インターネットが普及した現代でも、テレビがある生活は欠かせない。そのテレビやラジオを生んだ国は、言うまでもなくアメリカだ。初期のテレビ放送は今日の三大ネットワークの中、ABCを除く、NBCとCBSが担(にな)った。ここニューヨークで半世紀近く続く放送の博物館は、そのCBS放送が設立したものだ。

隣の公園が気に入った

初めてアメリカに行った1981年の夏、当時はまだ「放送博物館 (Museum of Broadcasting)」を名乗っていたこの施設を訪れた。場所はミッドタウンの53丁目東3番地、5番街を東に入った所のビルの2階と3階に入っていた。ただこの時は、ちょっと冷やかしただけで、せっかくこの博物館が有

する放送資料を閲覧したりすることはなかった。玄関ホール内のモニターには『ルーシー・ショー』でおなじみのコメディエンヌ、ルシル=ボールの動画が躍(おど)っていた。

博物館が入るビルを出た所の直ぐ東側には、奥に小さなナイアガラのような人工の滝が落ちる、これまた小さな野外喫茶のような公園が控えていた。摩天楼の谷間に造られた長方形の空間で、都市デザイナーがポケット

パークと呼んでいる趣向の公園だった。ペーリー・パークと呼ばれていた。

その滝の音に誘われて、中の野外テーブルに座った。白衣を着た給仕の男性が、注文を取りに来た。そこで何か飲み物を注文して、一時休憩したのを覚えている。滝の音は涼を呼び、とても居心地が良かった。



ペーリーパーク

さかのぼって 60 年代、摩天楼が林立するミッドタウンは、ややもすればその地上に日光があたらない薄暗い土地となっていた。そこでわずかなオープン・スペース(ポケットの様な!)を確保して、公共の憩いの場を作ろうとする動きがあった。しかし、市の当局は、財政上の理由で反対していた。

その時、私財を投じてこれを実現したのが、当時 CBS 放送の会長だったウィリアム・ペーリー(William S. Paley)、その人だった。ペーリー・パークの成功は、数年後、このミッドタウンに第二のポケットパークを生み、その後このアイデアは世界中へと広がった。日本にも、ポケットパークという名称の小公園が各地に作られている。

隣り合う公園と博物館が CBS と関係するわけだが、実は博物館の方も、ペーリー会長がその財政を支えたそうだ。さらに、アイボリータワーと呼ばれ超高層の CBS 本社ビルも、1 ブロック東の 6 番街沿いに聳(そび)えている。

二十世紀後半の映像の宝庫

その後 91 年、92 年と、二年続けて春休みにニューヨーク市を訪れた。92 年春は、まずジョージア州のアトランタに行き、そこから隣のアラバマ州へと公民権運動※1 の舞台を車でめぐった。この時の体験に触発されて、帰りに訪れたニューヨーク市では、改めてこの博物館を訪ねた。60 年代の映像を見るためである。

建物はその 1 年前、5 番街を挟んで西側のそして 1 ブロック南の 52 丁目のビルに引っ越していた。その名称も「テレビとラジオの博物館」と、名を変えていた。博物館は上階へと拡張され、そこに過去に CBS で放送されたニュース番組なども収録されている「ライブラリー」が設置されていた。

ライブラリーの受付で閲覧を申し込むと、空いているブースが指定され、その席に座る。目の前にはアップル・マッキントッシュのコンピュータが置かれ、自分が指定したニュース番組を選んで視聴できるようになっていた。この時、初めてマウスを使った。かねてから聞いてはいたが、こんなにも便利なインタフェイスだとは思わなかった。操作が、実に快適だった。

ところで、60 年代中頃までのニュース映像は、やはり白黒が多かった。まずは公民権運動のそれより、日本に関係のあったヴェトナム戦争の資料に目が行った。従軍レポートのそれは、南ヴェトナムの戦場に行くアメリカ軍の小隊を捉えていた。収録は 67 年の秋である。アメリカがヴェトナムに本格介入して 3 年目の冬を迎えようとする頃だった。兵士たちの様子から、当初の楽観は消えて米軍の攻勢が行き詰っている様子だった。

ジャングルでの記者のインタビューに、小隊長は煙を燻(くゆ)らせながら、受け答えす

る。クリスマスを前に、彼らは戦場を離れるわけには行かない。その表情が元気がなく、戦場に厭戦(えんせん)気分が漂っているのではと、思わせるものだった。実際、その数か月後、ベトナムでは解放戦線と北ベトナム軍によるテト攻勢が始まり、これにより米軍のベトナムへの介入は後退して行くことになる。それを暗示するような映像だった。

この時の公民権運動をめぐる南部への旅で、避けて通れなかったのが、かのマーティン・ルーサー・キング牧師の事跡だった。この運動の偉大な指導者は、その同朋であるアフリカ系黒人が多く戦場で倒れて行くのを見て、次第にベトナム反戦に傾斜して行った。そんな矢先、遊説先のテネシー州メンフィスで強盗や殺人を重ねていた犯罪者に狙撃され命を落とす。

コンピュータから流れるビデオ映像は、その時のニュースを流していた。キング牧師の暗殺は晩の6時過ぎだったため、その悲報はゴールデンタイムに、CBS ニュースの速報として流された。動揺するキャスターは、直ぐに現地の白黒映像を流した。キング牧師を高く評価する人々には、あまりに衝撃的なニュースだったのだろう。それがありありと伝わる映像だった。

これに先立つ1963年秋、テキサス州のダラスから伝わった映像にも衝撃を受けた。南部を遊説中のケネディー大統領が暗殺された時のニュースだ。キャスターのウォルター・クロンカイト(Walter Cronkite) ※2が、速報のテレックスのテープを読み上げながらこの悲劇を伝えた。大統領が狙撃されたオープンカーの向かう先では、CBSダラス支局長のダン・ラザー(Dan Rather)が到着を待ち構えていた。突然の知らせに急遽ラザーがマイクを握り、テレビ中継に臨んだ様子も映っていた。テレビの速報性が発揮された場面だ

った。

ライブラリーでは、若い学生風の青年がこうした資料の貸し出しに当たっていた。昼間のスタッフと入れ替えに、夜間だけの当直として仕事をしていたようだ。身のこなしのスマートな、好青年たちだった。



クロンカイトとウィリアム・ペリー(右)

ペリーセンターフォーメディア

その後、この博物館を訪問してはいない。しかしこの間、テレビとラジオのような既存のマスメディアの環境は激変しつつある。95年のウィンドウズ95の発表以降、インターネットが爆発的に世界に広がった。またラジオ番組を選んで聞けるポッドキャストのようなツールも普及して来た。ネットでは、日本からでも、全米の市民が視聴するニュース番組、例えば『CBS イブニング・ニュース』などを同時に見ることができる。

単にテレビとラジオだけでなく、その他のメディアも扱うことになったので、博物館名も変えることになり、2007年からは創設者ウィリアム・ペリー氏の名を冠した『ペリーセンター・フォー・メディア(Paley Center for Media)』と名乗っている。

館内には、過去のテレビ番組などを上映する劇場なども用意されている。また、TVス

ターやジャーナリストを参加させたイベントなども盛んに行われている。

この間、西海岸のロスアンゼルス市のビバリーヒルズでも博物館の別館開館の動きがあった。これはその後縮小され、現在ニューヨークと同様の資料が、ビバリーヒルズの公共図書館に預けられ、別館は閉じられている。なぜロスアンゼルスに？とも思うが、これは全米規模でのテレビ制作が、東部のニューヨークでニュース番組の制作が、西部のロスアンゼルスでエンタメの番組が製作されているからではと思う。テレビ各社は、ロスアンゼルスのハリウッド界限に、それぞれ番組制作のスタジオを持っていることから、容易に想像できる。

吹き替えではあったが、アメリカのTV番組に親しんできた方なら、一見の価値がある博物館である。そこでは、『刑事コジャック』などの懐かしい映像が迎えてくれるだろう。

※1 公民権運動とは、南北戦争後も続いた黒人への差別をなくそうとする、南部の黒人中心の政治運動。60年代の南部では、公共交通機関や公立の学校他で、差別を解消しようとデモやボイコット、レストランでの白人専用席に黒人がすわる活動など、多様な形で差別解消を訴えた。

※2 クロンカイト氏は、東部時間午後6時半から流される『CBS イブニング・ニュース』のアンカーマンを1961年から81年まで続けた。ここで紹介したテト攻勢後のヴェトナムをくまなく取材し、戦いでなく交渉を！と政府に迫り、時のジョンソン大統領の対応を転換させたことは、今も語り草になっている。「アメリカの良心」とまで評されたこともある。その降板後、後任のアンカーマンにダン・ラザー氏が就いた。

メモランダム

公式サイトは、

www.paleycenter.org となります。

住所は、

10019 West25, 52street, New York, NY
52丁目と53丁目の間を占める。

最寄り駅は、メトロ E・M 線の 5th avenue
& 53street 駅。

右にユニクロの旗艦店(世界最大規模だそう)を見て5番街を南下し、一つ目を右折。直ぐ。

月火は休館。水木金は12時~18時。土日は、11時から。

入場料は、会員無料。大人20ドル。教師や学生・シニア他は16ドル。12歳以下の子供は無料。